札幌大学総合論叢　第23号（2007年3月）

〈研究ノート〉

SUOMIとNORGEの記憶

進　藤　賢　一

はじめに

SUOMI（スオミ）とはフィンランドの別称，NORGE（ノルゲ）はノルウェーの別称だ。JAPANを「日本」と呼ぶのと変わりない。オリンピック大会などで選手のウエアやバッグを見ると，ごく一般的にこうした表記で国名が示されている。ヨーロッパでも日本の面積を上回る国は3つしかないが，その1つSVERGE（スヴェルゲ）はスウェーデンの別称でやはり北欧の国にくくられる。

クロスカントリースキー遠征が多かったせいか北欧に出かけることには恵まれたが，いずれも冬期間だった。今回は夏の北欧を訪れた。

「おおたき国際スキーマラソン」を始めて17回目（07年）になる。2006年3月，この大滝村は伊達市に合併したため独立した村としての歴史を閉じることになった。平成大合併の犠牲か，過疎地帯の切り捨てか，といった負の側面を感じないわけではない。

この国際スキーマラソンは第2回目大会以降1000人以上の参加者で好評を得ている。

10kmの「常設コース」もあるし，3kmの立派な「ナイター照明」も取り付けられている。

閉村を前に，この「おおたき国際スキーマラソン小史」を書き残しておく必要があることに気づいた。日本語と英語とフィニッシュで書く計画で進めている。

大会を初めて設定したのは，スオミの人々である。ヘルシンキ在住のスポーツジャーナリストであるスチッグ・ホッグブロム夫妻やギッタ・ヨキビルタなどが私たち大滝村民と一緒に作り上げた冬のイヴェントであり，村の活性化と村民に勢いと健康をもたらす絶好の機会と位置づけた。

スオミの人々が関わって出来た大会は，毎年スオミをはじめ多くの外国人が参加した。

今回の北欧訪問は大会設置に関わった人々に当時の状況をインタビューすること，関係者を17回大会に招待すること，北欧のクロスカントリースキー練習施設や競技場を見学することであった。

そこで，北欧で見たこと，伺った話の内容，考えたことを記述しておく必要性があった事柄について日本との違いなど比較して書かせていただくことにした。

1，夏休みは誰もが1ヶ月以上，それは北欧の水準だ

06年6月末，ヘルシンキから北に汽車で30分行けば，近郊地帯のケラバがある。そこに夫を3年前に亡くしたギッタ・ヨキビルタを訪ねた。夫のエーロはフィンランデア・ヒーヒトとして知られるワールドロペットレース75kmの競技中，心臓発作で倒れ，帰らぬひととなった。私は，10年ほど前，同じレースを走るためにエーロからレースウエアなど一式を借用して出発点のハーメンリンナ（シベリウス生誕の地）から，大きな氷河湖カツマヤルビ湖を経由し，75km先のラハティまでスキーで走ったことがある。

1万人ほど参加するこの大会は湖上を走り，山間地や野原，畑の上を走破するものでメルヘンの世界の広がりを驚嘆し眺めながら滑る。途中，凍り付いた湖の畔でサウナに入っている人々が裸で応援する光景にも遭遇した。寒いわりに積雪量の少ないスオミの国，畑にはとうもろこしの切り株や牧草の一部が露出する，その上に圧雪したクロスカントリスキーコースができていた。いかにもヤン・シベリウスの音楽が聞こえてくるような世界だ。

以前，ケラバを訪ねたとき，ヨキビルタの家族は鉄道駅近くの大きな家に夫婦と子供3人が住んでいたが，子供が独立し家を離れていった上，未亡人になったギッタはスーパーマーケットなどに近いアパートに居を変え，ひっそり暮らしていた。

アパートは広く，日本とは比べようがない。ベランダや室内狭しとばかり，花の鉢が置かれていた。

私が行くというので成人した子供2人（長女のミーナと次男のヤンニ）が母ギッタを訪ねてきて，夕食を共にした。娘のミーナは男友達とロッククライミングを楽しみ，世界の大会にも出ている。日本の一流選手も知っているし，ノルゲのロフォーテン諸島のヘニングスヴォー周辺の岩場でよく練習するという。ロフォーテン諸島はタラ漁で知られているが，氷河で削られた山や岩が海上に浮かぶ北欧で最も美しい島々である。

ミーナはデザイン関係の会社に勤めているが，夏休みは1ヶ月半ある。6月下旬から9月上旬までの間，自由に休日を選択できる。これは，フィンランドの一般サラリーマンだけでなく，デンマーク，スウェーデン，ノルウェーなど北欧の国々は，皆共通している，

という。

多くの人々は休暇を利用し，地中海のコスタデルソールやヨーロッパ各地，アメリカなどを旅する。

ヤンニは独身で家を購入し，「負債償還が大変。でも独身時代，家を購入するひとは多いよ」といった。

数年前，オスロ在住のグンヌルフ・スルエッタが北海道を訪ね，拙宅に1週間泊まっていった。彼は秋に休暇3ヶ月を得てアジア地域を旅していた。勤め先はオスロパワーという電力会社である。

長野オリンピックの時，スヴェルゲ（スウェーデンの別称）在住で日系アイスホッケー選手の八幡君が，日本選手として五輪出場を果たした。スヴェルゲから出場するには少々体力不足だったからであろう。彼の母親は，この国の中部，インションの街のトウモクヒュースという日本人の経営する住宅建材企業の社長秘書であったが，オリンピックの2ヶ月前から休暇をとって来日し，子供の練習を見守ったのである。私は後日，会社の社長博多昭夫氏に「どうしてそんなに休めるのか」尋ねたが，彼はさりげなく「ここはスウェーデンです」といった。

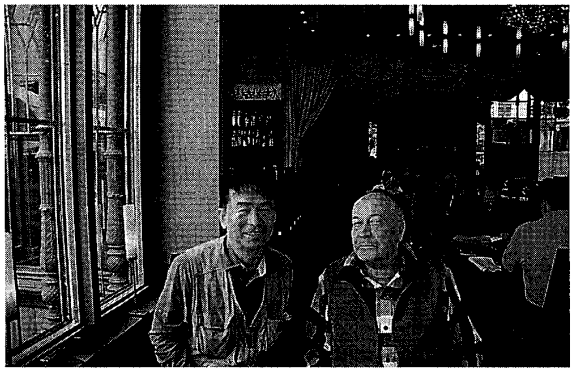
06年7月，スオミのちょうど北緯66度，北極圏との境にあるロバニエミの街を訪ねた。台所用品の製造や販売を手がける会社の経営者トム・パッソーヤに3日間位街や周辺農村を案内してくれるようメールで依頼した。彼の返事は，「夏休みは地中海で過ごすのでロバニエミにはいない。宿は予約しておくよ」というものだった。

会社社長でも長期休暇をとっているのだ。

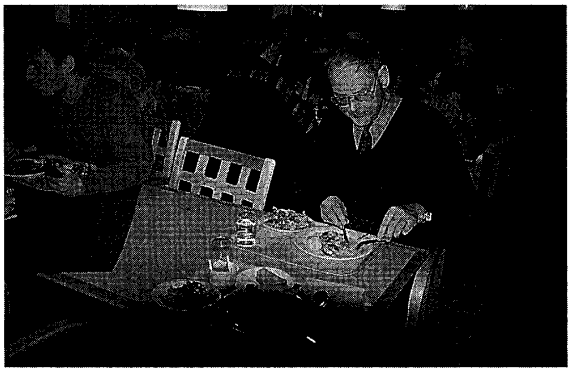
日本は豊かな国である，と日本人は思いこんでいる。だが，休暇となれば黄金週間，盆，正月以外に取るのは難しいのではないか。豊かさとは何か，改めて考えさせられる。

ギッタ・ヨキビルタが夕食後，車でシベリウスが数々の名曲を生んだ森と湖を案内してくれた。ケラバからやや北ヤルベンパ付近にアイノラ湖があり，湖畔にはシベリウスが半生を過ごした家と墓があった。湖畔には別荘やサウナが点在するスオミ特有の景観がそこにあり，午後10時の夕日が湖の彼方に沈みかかっていた。静かな湖畔には人影はなかった。ヤナギランなどの野草も真っ盛りで，家の周りには家庭菜園がありトマトが赤く熟していたのが印象的だった。

日本よりわずかに狭い国土面積だが，北海道人口を下回る。さしたる隆盛な産業も見当たらないが，そこはかとなく豊かさが漂っている。



スポーツ・ジャーナリスト，Stig Höggblom と歓談，ヘルシンキ，エスプラナーディ通り「レストラン・カプリ」にて（2007.6.）。Stig は「おおたき国際スキーマラソン大会」創設者



ヘルシンキ大学，スタッフレストランにて Arvo Peltonen 地理学教授(右)と昼食をとる。大学は街の中心，元老院広場横にある。2005.2.

2，スチッグ・ホグブロムとの再会

6月下旬のヘルシンキの街は，心なしか人通りが少ない。冬でももっと人が居た感じがする。夏のバカンスで多くのヘルシンキ在住者が地中海方面に出かけたのである。

アメリカのボストンに住んでいたフィニッシュのスチッグは，夫人の死で旅行業が出来なくなったから，ボストンの住居や事務所を整理してヘルシンキに戻ったらしいという情報があった。ケラバのギッタからの電話でスチッグの居場所を突き止め，電話した。

スチッグはスポーツジャーナリストで外国のオリンピックや世界選手権など取材し，執筆活動してきたのだが，もう，80歳になって仕事は引退，第二の人生を女友達のカーリナと送っている。

私はスチッグにワールドロペットスキー大会（毎年14カ国で行われるクロスカントリースキー大会で全部の大会を時間内に走ればロペットマスターの称号が与えられる）に参加するよう勧められたことがある。また，おおたき国際スキーマラソン大会を提唱し，実現した人物でもある。

電話で，彼がアメリカからヘルシンキに戻ったのは数日前だったことがわかった。

翌日，街の中心エスプラナーディ通りのレストラン「カプリ」で落ち合うことにした。

札幌大通公園の感じで，その中央にある「カプリ」ではヘルシンキ大学教授のアルボ・ペルトネンと一緒にトナカイ料理を食べたことがあったが，広いガラス窓，自家製ビール醸造機械，古いスオミを漂わせる雰囲気などが印象的だった。昼間は混雑するレストラン，女友達のカーリナが先に行って席取りをしてくれたので並ばずにすんだ。

カーリナはスオミ人で68歳，英語はうまい。事実上スチッグと一緒に住んでいるから夫婦の感じだ。スチッグの前夫人は大島則子という日本人だった。どうしても則子さんの

話題が出る。カーリナに悪いと思って別の話に振ってもまた戻る。スオミの人は，その点非常に割り切っているから心配ないことに気がついた。恋人の前で死別した前妻の話など，日本ではタブーと思われるが，さすが国民性が違う。

スチッグに会う目的は2つあった。1つは来年2月開催されるおおたき国際スキーマラソン17回大会に招待を取り付けること，もう1つは，「おおたき国際スキーマラソン小史」を創るから，開設当初の事情を聞き取りすることだった。

前者は快諾してくれたが，後者は時間がなく結局わたしが帰国してから質問用紙を送るから書き込んで欲しい，ということで終わった。

私は，明後日，汽車でヘルシンキを立ち，コーボラ，クオピオ経由でカヤーニに行くが宿が取れない。電話したが満館ということだった。何とかならないか，とスチッグに頼んだ。行き先はヴォカティという街だが。スチッグはカリーナの携帯電話ですぐに電話し，「カヤーニの駅にヴェッサ・ペッカ・サルパランタが迎えに来ている。彼が案内する」という。

ヴェッサ・ペッカはスオミのかつての著名なノルデックスキー選手だ。

「それにしても，君が通過していく鉄道沿線は，スオミで最も美しい場所だ。感動するだろう」と付け加えた。

かつて一度北海道教育大学の山下克彦教授とボスニア湾最奥のオウル大学に地理学者ラウカウネンを訪ねたことがあったが，タンペレ経由だったせいか車窓からはほとんど湖は見ることがなかった。

途中，サヴォーリンナの街にヘルシンキ大学のアルヴォ・ペルトネンが居るから立ち寄るべく電話したら，「明日，国際地理学会議出席のためオーストラリアのメルボルンに出発する。お前は何故出席しないのか」と逆襲された。

アルヴォは今，流行の観光地理学と環境問題に取り組んでいる地理学者である。

かつてヘルシンキ大学の図書館でアルヴォは，世界の地理学者の業績を検索して，「日本人は欧文論文を書かないから，載っている論文が少ないな」と嘆いていた。スオミではフィニッシュで書いた論文は，論文とはいわない。「英語，フランス語，ドイツ語のような国際語で書くものが論文だ」

同じことは，プラハのカレル大学のヤン・シーコラ教授もいっていた。札幌大学と論文の交換をしようという話になったとき，「チェコ語の文章は読めないよ」というと，「チェコ語で書いたものは論文とはいわない。国際的に通用する言語を使うのが普通」と。

日本の学会誌は日本語中心の論稿が多く，後尾に欧文のサマリーをつける程度である。

3，ガッレン・カッレラとイサック・ワックリン

鉄道のヘルシンキ中央駅の前に立つ。中央の玄関口は半円形をし，その両側に大きな人間像が2組，左手中央には塔が聳えている。スオミが生んだ建築家エリエル・サーリネンの設計による重厚な駅舎である。1914年に建てられたナショナル・ロマンチシズム建築の傑作とされるものだが見応えのある建物である。サーリネンはボストンのマサチュセッツ工科大学の建物など建築物の設計のほか，キャンベラなど都市設計コンクールにも加わり，応募している。キャンベラは最終的にシカゴのバーリー・グリフィンに1位を譲ったが，堂々2位の成績であり，グリフィンの設計内容にかなり似たものであった。

中央駅正面から街側を眺めると電車通りを越え，左手にアテネウム美術館がある。北欧ではノルゲに行けば印象派のムンク，スヴェルゲはゾーン，スオミには叙事詩「カレワラの詩」を題材にしたガッレン・カッレラやスオミロココ主義を代表するイサック・ワックリンなどの画家がいた。

アテネウムはギリシャ神話の知恵の女神アテナから取ったものらしい。展示物は地元画家ばかりでなくゴッホ，ゴーギャン，モディリアーニなどの絵もあるが，圧巻はガッレン・カッレラの代表作「レンミンカイネンの母」である。

ガッレン・カッレラは印象主義と象徴主義，そして民族主義が一体化した画風で知られるが，19世紀末の熱い民族主義が表現されている。

スオミは「カレワラ」を抜きに語れないといわれるほどの民族叙事詩である。3万行に近い大長編で，宇宙創造から詩人の誕生，冒険話，キリスト教世界の出入りが描かれている。夢とロマン，人間らしさが表現されているが，これを音楽にしたヤン・シベリウス，絵に描いたガッレン・カッレラは国民的英雄に思われている。

ガッレン・カッレラ自身のデザインによる専用美術館がヘルシンキ郊外にあり，カレワラをテーマにした一連の作品が展示してあるという情報を得たが，機会に恵まれなかった。

ヤン・シベリウスはグスタフ・マーラー以来の大作曲家である。私は，大序曲「フィンランデア」や小品「トゥーネラの白鳥」，著名な「ヴァイオリン協奏曲」などもよく聞くが，7つの交響曲は傑作ばかり。湖と森，農地など田園風景など国土がおとぎの国のような雰囲気に包まれている，その情景を見事な五線譜で作曲している。

「カレワラの詩」に影響を受けて民族ロマン主義的な作品が多いが，人生の後半は古典主義に変わっている。

まちはずれの森のなかにシベリウス公園がある。パイプオルガンを模したモニュメント

と御影石の上に置かれた宇宙を見つめるシベリウスの肖像のオブジェがあるが，スオミを世界中に知らせた大作曲家に感動せずにいられない。

ヘルシンキ中央駅の西に隣接して総ガラス張りのモダーンな国立現代美術館があった。名前は「キアズマ」というが，アメリカの建築家スティーブン・ホールの設計による。8年前にオープンしたばかりの新しいミュージアムであるが，展示物はデジタルアートを始め，動く写真の抽象画像，首から上のない死体の山，ムンクの「叫び」とは違った同名の絵画，など奇抜な現代芸術品ばかり。アバンギャルドの世界である。建物外にも彫刻などの芸術品が並べられていた。

中央駅から5～6分歩くと何の変哲もない並びビルの1つに「アモス・アンダーソン」美術館があった。個人収集品美術館としてはスオミ最大というふれ込みだがフィンチの「花」やエンケルの「2人姉妹」の絵が輝きを放っていた。

一階の壁は面や哺乳動物，魚類の凹凸をつけて張り合わせた前衛芸術。パルムの描いた「ストックホルムの地図」は詳細で正確な芸術品だった。彫刻やガラス製品，テックスタイルなどの工芸品芸術品も数多い。

ここに紹介したのはヘルシンキの一例だが，ストックホルムやオスロなど北欧の国々の都市にはことのほか優れた美術館や博物館が多い。パリやロンドン，マドリードなどが著名であるが決して見劣りしないものだった。

「キアズマ」に隣接してフィンランド独立の父，マンネルハイム像がある。

4，スオミの悲劇とマンネルハイム

スチッグが問うた。「マンネルハイム像を見たか。マンネルハイムがどんな人間か知っているか」。スオミの人々はことのほか祖国の英雄に肩入れをするものだ。

スオミはスヴェルゲに600年，ロシアに100年支配され，これらの国々の圧政に苦しみ，属国としての苦汁を嘗めさせられた歴史をもつ。

1939年の独ソ不可侵条約の秘密議定書で力を得たソ連邦はスオミ侵攻を開始し，屈服させる。ソ連邦はカレリア地方の割譲を要求し，成功した。スオミはスヴェルゲに助けを求めるが中立国を理由に拒否される。ドイツ，ノルゲにも応援を求めたがこれも失敗する。

第二次大戦の転換期となったノルマンディー上陸作戦のころ，マンネルハイムはソ連との和平を主張したが，これを無視してソ連軍はスオミに大攻勢をかけ多大な損害を与えたのだった。

この戦いでスオミは12万人の戦死者を出し，国土は荒廃し，数多くの孤児や戦争犠牲

者を生み出した。さらに国土の12%にあたるカレリア地方を割譲され，3億ドルの賠償金まで請求されたのである。

大統領以下閣僚は戦犯として獄舎に繋がれ，長い期間を経て出獄し，独立を達成する立て役者になったのがマンネルハイム。スオミを「バルトの囚人」から解放したのは国民の結束と，粘り強さ，優れた指導者達の存在である。

帝政ロシアの高級将校だったマンネルハイムは，スオミに来たときロシア革命が起こり母国に帰れない。そしてスオミとソ連の戦いではスオミ側の総司令官を務めスオミを救い，大統領になる異色の存在だった。

スオミは国土こそ34万平方キロメートルで日本とさして変わらないが，人口は520万人で北海道より150万人も少ない，いわば小国である。常に東西の列強に脅かされドイツの干渉も受けてきた。ソ連に賠償金も支払い，荒廃した国土も国民の努力で復興した。カレリア地方は割譲されたままである。日本の北方領土返還運動に似た対ロシアへの返還運動は起こらないという。今日の状況下で反ロシア運動を起こしても意味がないことをスオミの人々はよく知っている。

スオミは国民に兵役義務が課せられている。兵役を免除要求する若者はいないともいわれる。結束して国土を護る気風はどこの国より強い。美術ではガッレン・ガッレラやイサック・ワックリンが，音楽ではヤン・シベリウスらが国民を奮い立たせる芸術を確立し，スポーツではオリンピックで金メダル9つを獲得するパーボ・ヌルミなどを生み出した。

戦って勝てない相手に戦いを挑むのは無理だが，理不尽な攻撃には国民が結束して戦う思想がマンネルハイムやリュチ大統領によって築かれたことへの国民の敬意はただならぬものがある。

パーボ・ヌルミの像
中距離陸上を中心に史上初，オリンピックで9個の金メダルに輝いたスオミの英雄像はオリンピックスタジアムの正面におかれている。彼は通貨10マルカの肖像になったことがある。

5，溢れる森と湖（コーボラからカヤーニ）

ヘルシンキ大学の地理学教授アルヴォ・ペルトネンはスオミの地図を見ながらこう説明してくれた。

「スオミは南北 1200 km ある。約 100 万年前のクローマー間氷期，50 万年前のエルスター氷期，30 万年前のホルスタイン間氷期，20 万年前のザーレ氷期，15 万年前のエーム間氷期，10 万年前から 1 万年のヴィクセル氷期で，沖積世に入ってからは後氷期といわれる。最大の氷期は 3 氷期。うちもっとも新しいヴィクセル氷期でスカンディナヴィア地方を広く被っており，スオミも南部のバルト海沿岸を除き，ほぼ全域が氷床であった。氷床の高さは平均で 1500 m に及び，重さは 1 平方キロメートルあたり 3000 万トンになり，地表削剥力は強大で多くの湖をつくり，海底も削ってフィヨルドなどができた。こうした氷床は南々東に移動したため細長い氷蝕湖は，概ね氷床の移動方向に横たわっている。ターミナルモレーンがタンペレからハーメンリンナ，ラハティ，コウボラ，ラッペンランタにつながるように形成され，モレーン上は道路や鉄道，集落形成で重要な意味を持っている」。

スオミには周囲 200 m 以上の湖が 6 万個ある。都市はこれらの湖を避けるようにモレーン上に立地している場合が多い。鉄道線路や道路の造成で苦労するのは氷河湖のひしめく湖沼地帯。だからこそ沿線風景は美しい。

2 階建て列車はヘルシンキからラハティ経由，コウボラに入った。ここまでは車窓に現れる湖や河は僅か。コウボラから北上しクオピオ，カヤーニに至る沿線は湖の中にある陸地を繋いでいるような湖沼群である。

80 歳のスチッグ・ホグブロムがいった。「君が行く中央部の鉄道沿線はスオミで最も美しい地域である」。

若きミーナ・ヨキビルタが「こんな美しいスオミに生まれてよかった」。

こうした意味がよく分かる景色だ。

湖の中にある森は白樺と赤松，樅が主要樹種で，雑木に柳などがある。白樺は自然林だが赤松や樅は人工林が多い。

樅は天を突く巨木もあり，周辺の木々の葉が淡い緑であるのに対し，濃緑だ。線路の周辺はルピナスが満開であった。

コウボラを過ぎると大小，無数の湖沼群が現れる。たまに湖畔に住居やボートが係留されている。花崗岩の岩盤が多く，その上に生えている白樺などはやせ細っていて，ちょうどアラスカなど永久凍土帯で見る木々の成長ぶりだ。

何処の家も煙突が付随しており，壁には薪が積み上げられ冬の暖房用になる。

湖沼に面してサウナがある。スチッグの話は「スオミでサウナのない家はないし，アパートでもセカンドハウスにも大抵サウナは付いている。サウナは海，湖沼，川べりに多い」。

ミッケリの駅に到着した。ヘルシンキから3時間である。駅名はフィン語とスヴェルゲ語の並列表示だ。

これはスオミに住むスヴェルゲ人が6%程度いるから，ということだった。

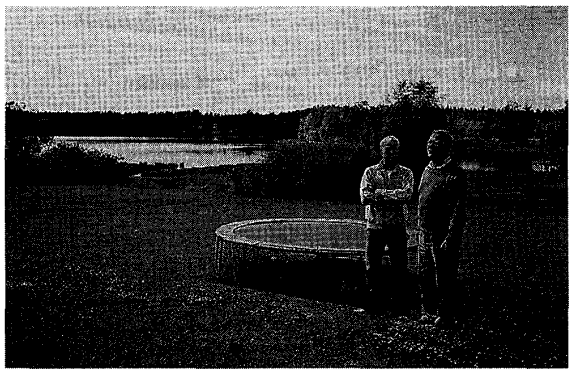
地図を点検すると，このあたりは湖沼のなかの僅かな空き地を人間が土地利用している様相に映る。

赤い壁，白い窓枠と柱，スレート屋根の家屋は北欧に共通した色調であるが，家の構造や組立型には明らかな違いがある。スオミはログ風に角材を横に積み重ねる方式であるが，スヴェルゲは集成材を利用したパネルの組み合わせが多いようだ。

敷地も広い。スチッグのセカンドハウスはヘルシンキの東1時間のポルヴォの街の海辺にあるが面積は8000坪，アラスカのフェアバンクスにあったウイリアム・パレット教授の家も8000坪だったから，地積は広い。

6，世界初，ヴォカティのスキートンネル

ヴォカティはスオミの中央部，世界ではじめてつくられた長さ1.2km のクロスカントリースキートンネル，陸上に雪の消える春から秋まで滑走できるコースで世界中からアスリートが集まる



サルパランタ父子，2人ともスオミを代表するクロスカントリースキー選手。子供のトッピ・サルパランタは現在，高橋大斗選手のコーチ（トッピ家の庭にて。ヴォカティ）

北緯62度地点にカヤーニの街がある。巨大なオウル湖とナウス湖に挟まれたカレリア中部の人口3万人ほどの田舎町だ。2つの湖の繋ぎ水路は落差があり水力発電所が稼働していた。

スオミは湖の落差を利用していたるところ水力発電所がある。でもエネルギーの水力への依存度は18%，火力の51%をはるかに下回る。落差のある地形，河川が少ないからノ

ルゲやスヴェルゲのように水力国にはなれない。

昼過ぎカヤーニ駅に降り立つと，ヴェッサペッカ・サルパランタが出迎えた。既に61歳に達しているが，かつてはスオミを代表するノルデックスキーの名選手で，多くの人に知られている。

ヴェッサペッカに私のカヤーニ到着を連絡したのはヘルシンキのジャーナリスト，スチッグ・ホグブロムであった。スチッグはフィンランド大統領と謁見し，握手している最近号の新聞を私に託し，ヴェッサペッカに届けるよう依頼された。

大統領に謁見した写真が新聞に載るスチッグ。ヘルシンキ大学教授のアルヴォ・ペルトネンが「ヴェッサペッカは著名なスキーヤーだからわたしも知っているよ」といったかつての名選手などに出会える幸運に恵まれた。

ヴェッサペッカの車は30分ほど走って，やはり多数の湖に囲まれ陸の孤島に見える人口1万人のヴォカティの街に到着。スポーツクラブのホテルに案内され，レストランで歓迎のビールを飲んだ。

彼は「明日，息子のトッピ・サルパランタと一緒にスキートンネルや競技施設を案内するから今日はゆっくり休んで欲しい」といって立ち去った。

トッピは，父親と同じスオミを代表するノルデックスキー選手で，いまは31歳。日本のノルデックスキー選手高橋大斗氏のコーチだ。高橋氏はワールドカップで2勝しているがジャンプの練習中，ランディング・バーンに顔面から落ちて怪我をし，トリノオリンピックは不本意に終わった。07年2月，札幌で行われたワールドカップノルデックスキーに備えて，ここヴォカティで練習を積んでいたが，札幌大会でもジャンプで失敗し負傷した。

世界を代表するノルデックスキー選手が集まる舞台で，多いときは600人が宿泊し，練習に励む。宿泊施設，練習施設が充実した世界でもトップクラスの土地柄であり，また周囲が風光明媚で，精神的にリラックスするためにもいい場所といっていいだろう。

特に，スポーツクラブの宿は，一流ホテル並の設備がある立派なもので湖に面して平屋，一部2階の贅沢な空間をたっぷり利用したものだった。

ここには夏の間1.2㎞のトンネル内に雪が敷き詰められオフシーズン雪上スキートレーニングができるのだ。

宿の近くにスキートンネルの入り口があったので内部を見せてもらった。クラシカルコースを往路と復路にカッテングして，中ほどをスケーティングが走る構造で2車線トンネル規模である。

雪は春先の天然雪をブルドーザで敷き詰め，秋まで持たせる。室温は零下4～5度に1

年中保ち続けるのだ。半地下になっていて，外から眺めるとアーチ型の土盛りが続いているからトンネルの位置確認が容易である。

使用料は有料であるが安い。トンネル運営会社は赤字で推移してもいい，との考え方で造ったが，利用者が多く黒字が続いているという。ただし，運営会社はホテルやジャンプ台，運動場やテニスコート，夏のローラースキー場，トンネル入り口のレストランや土産物店など総合的に経営しているから，全体として黒字という意味だとも付け加えた。

周辺は湖と森林に被われているが，松，樅，白樺などの林の中は北海道のように笹で覆われることはなく，大部分がベリーである。ブラックベリー，ラズベリーなど10種類前後のベリーが敷き詰められたようにあり，トンネルスキー場の上部もやはり自然のベリー畑である。森林のなかは至る所ベリー群落であるから，スオミの人々が自家製のベリージャムを多種類つくるのはこうした野生のベリーが原料になっているからである。

夏のスオミは白夜で太陽はなかなか沈まない。ヴォカティは北緯62度だから 7月上旬，午後11時過ぎても明るい。

夕食を食べてから，ゆっくり湖畔の森のベリー畑を通り過ぎ，アルペンスキー場を登り，ノーマルヒルジャンプ場に向かった。

途中，クロスカントリーコースが幾つもあり，間違わないように標識が出ているし，鉄道線路を横断する際は，木製のスキー専用橋が架けられている。

夏にはローラースキー大会もある。舗装されたコースも整備してあり選手が練習している風景に出会った。

ジャンプ台はパイプと木製の簡易台であったが夏もジャンプが出来るように滑降シートが敷き詰められていた。札幌宮の森の規模である。

さらに登り詰めると山頂に出る。眺望が凄い。湖と森の中に小さなヴォカティと連続するソトカモの小集落がみえる。どうみても街ではなくリゾート特有の分散集落だ。

翌朝，トッピとヴェッサペッカの親子サルパランタが宿に迎えに来た。コーヒーを飲みながらヴォカティのロケーションやクロスカントリースキー競技施設の概要の説明を受ける。2人は私が日本から持参したクッキーを食べながら，「コーヒーに良く合う菓子だ，コーヒーを飲まない日本人が何故こんなクッキーがつくれるのか」と喜んだ。

ロスアンゼルスのパロス・ヴェルデス・エステートに住んでいたドイツ系アメリカ人バーンハルト氏の家に一週間ばかり投宿したとき，「お礼に日本から何か送るよ，何がいいか」といったら「いずみやのクッキー」とすかさず応えた。日本のクッキーは一度食べると止められないらしい。

サルパランタ親子のガイドでエクスカーションに出かけた。

昨夜，登頂した山頂にトッピの車で辿り着く。高橋大斗氏がスキーポールを駆使して山頂に向かって走ってきた。

コーチのトッピは何も言わずただ見つめているだけだ。指導など宿に戻ってミーテングの時にいう。「今日は調子がよさそうだ。足取りが軽い」とトッピ・サルパランタ。

毎日何回も山頂までポールランニングしているのだ。私は，コーチと選手の関係，コーチの指導方法についてかねてから深い興味があった。これまで，コーチや監督が伸びるべき選手を台無しにしてきた事例をよく見てきたからだ。

答えがないのに選手に技術や体力養成を強要するため，オーバーワークになったり，選手の体質に合わない技術指導をして選手を潰す誤った事例は限りなく多い。コーチが自分の経験主義だけで選手を指導する誤りも知っている。

スオミのような冬季スポーツで強い選手を生み出す背景には優れた指導方法をもつ指導者がいるのではないか。

何も言わないトッピを見ていて，正確な答えが出る前は，がみがみ言わない。これが鉄則のように思えた。

指導者が選手に１つの技術的，体力的改善提案をしても，選手がそれを習得するのには時間がかかる。一番いいのは選手に考えさせ，自分で納得することだ。

私の宿の宿泊費，食費はすべてヴェッサペッカが支払った。おまけに土産として地名入り長袖シャツまでプレゼントされた。

初めて出会った人なのになんと親切なのだろう，と改めてスオミ人の人柄を感じた。

7，跨げば北極圏，ロヴァニエミの街はその線上

カヤーニから 300 km も北上すれば北極圏入り口のロヴァニエミの街がある。オウル経由の汽車も１日１本あるが時間がかかる。12 人乗りの小型バスが１本あり，バスを使えば５時間で到着する。早朝７時半のバスに乗り込んだ。早朝といっても太陽は午前３時に日の出の状態だから早いともいえないが，この時間バスターミナルは開いていない。運転手だけがバスを動かし，切符の販売もする。バスの後部座席にはテーブルがついているので書き物をするには便利であったが，バスはカーブの多い道路を速いスピードで走るから，テーブルの利用も難しい。客２人で出発する。途中乗り降りがあっても客は最高で５人。通過する部落には新聞の朝刊を下ろして行く。

北欧の国々のバスはよく利用してきたが，大型デラックスバスでも乗客が１～２人など珍しくない。国の税金でバスが動いているのだ。福祉国家の一面を見る感じである。

途中は相変わらず森と湖が続く。バスが速いのと揺れるから車窓の写真は撮れない。

ロヴァニエミに近づくと，中年の女性がバスの前方から歩いてきて「ロヴァニエミはフィンランドで最も美しい街です。何日いるの。楽しんでいってください」と観光ガイドまがいのことをいう。

この街の中を北緯66度の北極圏サークルの緯線が通過している。サンタクロース発祥の地で，同名の村のなかに「飛び越えると北極圏です」というラインが敷かれているのだ。

ロヴァニエミは人口は3.5万人でラップランドでは最大の都市であるが，規模は小さく3日間も居れば歩き尽くしてしまう。湖のような規模のケミ川とオウナス川が合流する地点の川縁に立地した街で，ヘルシンキからは北に835 km，ヘルシンキから飛行機は1日数便飛んでいるし，12時間の夜行バスもあり，鉄道も繋がっている。

1944年，ナチスドイツ軍によって街の大半が破壊された。今の街は建築家アルヴァル・アールトの設計によって造成されたから公園の中に街が沈み込んでいる感じだ。

ホテルもまちなかに7～8軒程度ある。私は，もっと小さな田舎町を想像していたから宿泊を心配したので，ロヴァニエミ在住の会社経営者ティモ・パッソーヤ氏にメールで予約をお願いした。しかし，宿探しはそれほど困難ではないことがわかった。

7月1日から3日間滞在して，北極圏の内陸都市の暑さを実感した。この3日間の最高気温はいずれも30度Cを越えた。街行く人々は半ズボン，ノースリーブが目立ち，上半身裸で野外レストランや河畔でくつろぐ市民の姿が印象的だった。氷河湖のような河川で泳ぐ人も多く，河畔水浴場は賑わっていた。緯度が似ているが500 kmも西，ノルウェーの街ボードーでは同時期セーターが必要なほど気温が低かったが，スカンディナヴィアでも内陸と海岸線の最高気温が10度C以上違うのに驚いた。

人口からすると異常に多いヨットやモーターボートの係留数。自家用ヘリコプターをトラックに積んで移動している，キャンプ場や河畔のキャンピングカー群，これらはスオミ各地から夏のバカンスで移動して来た人々の所有物であろうが，休暇や余暇に費やす国民の費用が大きいことに驚かされる。

街の東をボスニア湾に向かって流れるケミ川に架かるロウソク橋を渡るとオーナスヴァーラの丘と称される標高400 m程度の丘がある。西斜面はゲレンデスキー場やジャンプ台が備わっている。

その登り口に体育学校があり，世界各地から主にウインタースポーツを学びにやってくる若者達がいる。勿論，世界選手権やワールドカップを狙うアスリート達である。

ここに高橋君というノルデックスキーの留学生がいた。7年半ここでスキーを学んだが今は，スオミのスキーストック（ポール）メーカー，エクセル会社に勤め，日本の支社で

営業やスキー指導をしている。

ヴォカティでも同じだったが，アスリートを育てる環境が整っている。指導者，設備，用具，そして何より世界のアスリートが集まってくることで仲間意識が強まり，世界各地の大会に出場しても特別の感情を持つ必要はないから平常心で競技ができる。いつもの仲間と競技している気持ちになれるのだ。

ロヴァニエミは北極圏入り口であるから７月に入ると真夜中の太陽はない。しかし，真夜中も夕暮れ直後のような明るさだ。

シティーホテルは街の中心部にあった。真夜中の街が騒々しいので窓の網戸越しにしばし街を眺める。

酒に酔った若者達が騒ぎながら三々五々歩いている。ひとりの若い女が躓きながら歩き，携帯電話を路上に落とす。しばし眺めてそれを拾う。空き缶を蹴飛ばす，というより酔って空き缶に足が当たる。酔ったカップルが車から降り，やや長いキスをする。街の中に駐車禁止区域は見あたらない。

車が停まり，ふたりの若者が降り，トランクを開けてビール缶を出し，なにやら言いながら車に寄りかかって飲み始める。ビールが地元ラップランド製「Lapin Kulta」であることがわかる明るさだ。しばらくして彼らは車を運転して走り去る。

午前２時，まだ街は騒々しい。

若い女が３人，ホテル前のパブから出てきて歩き去る。カップルがパブに中に消えて行く。とぎれない人の移動。夜中も暑くて窓は開き網戸だったから，明るい夜には慣れたが騒音はつらいものがある。

こんな光景がロヴァニエミ中心部繁華街の７月上旬の真夜中だった。

湖に囲まれるようにロヴァニエミ教会の先鋒が真っ青な空を突くようにそびえたつ。

第二次大戦で破壊された教会だが，1950 年再建されたものである。

教会の裏手に美しい墓地があり，30 cm 四方の御影石の墓石こそ地中に埋め込まれて表面だけ地上に出ているが，そこには第二次世界大戦で亡くなった 20 歳代前後の若者達の氏名，生年月日と死亡年月日が刻まれている。墓石は赤い花々で飾られ，半世紀前の戦争が身近に感じられる。墓石の数も 1000 以上に及ぶ。

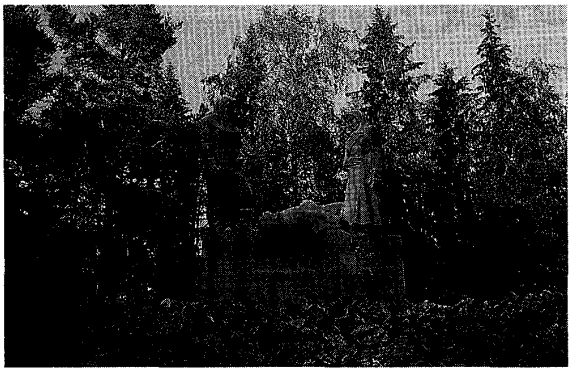
一角に高さ４m に及ぶ「戦死した仲間を見つめる２人の兵士像」ともう一方の角に「父を失った家族の失意の像」があり，母，兄弟，祖父母が遺体を見つめているのだ。

第二次大戦中，独ソ戦に巻き込まれたロヴァニエミ市民の怒りに満ちたやり場のない表情が印象的だった。

また，ほんのわずか小高い丘の石碑は，戦争中疎開先のスウェーデンで亡くなった子供

や老人の氏名が700人以上刻み込まれている。

他国の戦争に巻き込まれ，罪のない戦死者の群，彼らがいまでも戦争の悲惨さを訴えているように見えた。



第二次大戦での犠牲者墓地の一角に戦死した仲間をみつめる2人の兵士像があり，今日に反戦の意思を伝えている。

8，ラッピンからフィンマルク

北極圏入り口のロヴァニエミから南流するオウナス川に沿ってバスは北上する。60人乗り大型バスは国境を越えてノルウェーのトロムソ行きで約8時間の行程である。

ラッピン（ラップランド）からスオミ（フィンランド）最北のフィンマルク地方を経由し，スカンディナヴィア山脈を越えてノルウェー側に下りて行くのだが，バスの乗客に観光客らしいひとは私以外見あたらない。20人程度乗っている人々は，地元の住民である。このあたりは遊牧民のサーメがトナカイでも追っている景色を想像していたが，民族衣装の先住民族には出会わない。森と川，樹木構成は白樺，トウヒ，赤松であり山脈の標高が高くなるに従って樹木の背丈は低くなるが，樹種構成に変化があるわけではない。

ロヴァニエミから北上するなかに牧草地が現れ，まばらに農家がある。牛群はヘレフォードという茶褐色の肉牛であるが，乳肉兼用かもしれない。背の低い樹林のなかに牧場が出てくる一方，ロヴァニエミから80km北上した地点のロヒニヴァ付近で5～6頭のトナカイが道路を塞ぐ。道路に沿って牧柵があるが，高さからしてこれはトナカイ用ではなく牛の放牧用に見えるから野生のトナカイであろう。スピッツベルゲンのトナカイに比べ体も大きく，脂肪も乗っている。

キッテラにはホルスタイン飼育牧場があり，乗馬用馬（中種馬）が飼われていた。

この街はラッピンの北の中心で空港があり，アルペンスキー場を伴ったリゾート地である。氷河が削り残した標高530m程度の独立峰があり，一見火山に見える。この山に向

かってキャビンが夏でも動いていて，レヴィ湖周辺は別荘やホテル数も数多い。

キッテラからオロス，ムオニヨにかけた北緯68度付近の地域は，夏冬通じての一大リゾート地なのだ。

ムオニヨからスウェーデン国境伝いにキピスヤルビまで約200kmは氷河湖を繋ぐムオニヨ川に沿って登りが続く。

こうした集落にもリゾート地的雰囲気が漂い，ヴァカンスに訪れる人々はいるが，遊牧民の姿には会わない。

ラッピン地方には，かつてトナカイラップのほか，森林ラップ，漁業ラップといわれるラップランド人（サーメ）も居たはずであるが，スウェーデン国境に近いムオニヨ川に沿って続く道路からは遊牧民を見ることはなかった。

白樺を切って松を残す間伐が行われている。

樹木植生があることからして，永久凍土帯があってもツンドラ帯ではない。道路脇の野草はアザミ，ヤナギラン，タカネニンジン（セリ科）やミヤマキンポーゲなどで，これらの植生はロヴァニエミから北緯69度のキピスヤルビまで変わるものではない。

パロヨエンスーの集落で，バスは2手に分かれる。西北のトロムソ行きと真北のアルタ行きだ。どちらもノルウェーの海岸線にあり，北海から入り組んだフィヨルドの湾奥の街でアルタは北緯70度に位置していて，最北のノールカップへの中継点でもある。

乗り換える人数人が降りると，もうバスには3人の乗客しかいない。

アルタは世界遺産になっている紀元前に描かれた岩絵（船，トナカイ，人が岩に描かれている）が有名だ。2kmに渡り2000点が彫られている。

パロヨエンスーから少しばかり氷河浸食による山や岩場が点在し，その間に湖が広がる光景に変わった。今までは低湿な平原に，樹木植生，湖といった景観だったが変化に富みはじめた。

私は，ノルゲ（ノルウェー）とスオミ（フィンランド）の国境の町で遂にたった1人の乗客になった。20年ほど前になるが，トロムソからナルヴィック行きバスでもずっと1人の乗客だったことを思い出した。北欧の国々のバスや鉄道事情は，採算ベースに乗らないから交通機関を運休したり，廃止することはない。国家が僻地に住む住民に責任をもって移動の手段を提供しているのである。

フィニッシュしか話せない運転手が，最前列のバスガイド用椅子に来るよう手招きする。英語は通じない。国境は道中で一番高いと思われる鞍部に設定されていた。検問場所はスオミ側300m地点にあったがバスは停車することなく素通りしていった。

狭い峠ではなく広大なスカンディナヴィア山頂のフラットな石の谷であった。

国境からがらりと景色が変わる。晴れているのににわか雨が降る。バス内も寒く，ダウンを取り出して羽織る。

樹木はなくツンドラ風。山には残雪が残り，稜線は残雪で白い帯状のラインが形作られていた。

スオミは普通道路の時速制限100 km であったがカーブが少なく早さを感じなかったがノルゲに入ると時速制限90 km になり，道は狭くヘアピンカーブが連続する。

スカンディナヴィア山脈を北海に向かって下り降りるのであるがドライバーが眠そうで時折舗装部分を脱輪するので恐ろしくなり，なにやら話しかけては危険を回避しようと心がけた。

見事なU字谷，残雪とカール，これまで見てきた濃い青の湖色とは異なり，フィヨルドは明るいコバルトブルーである。

少しでも平地があれば，そこには牛や羊が野草を食んでいる。

残雪が溶け，急崖を滝となって落ちる光景は数多いがその態様が実にさまざまなラインを描いている。

フィヨルド海岸線に降りて約1時間走り続けた後，人口6万人，北極圏最大の街トロムソに到着した。20時の到着だったが，さすが白夜の季節であり，明るい夕方の7月初旬だった。宿が取れず苦しんだが，ヘルシンキのスタデオン・ホステルから予約を入れたヴァンドレルィエムで旅装を解いたのは夜9時を回っていた。

9，トロムソからロングイヤービーン

旅の内容を充実する秘訣は交通費と宿泊費を格安にすることである。食費は如何様にもなる。最近は船や観光バスにはシニア料金制度があって，65歳以上であればノルウェーなどは20％程度割安になる。そのことを知っておかないと，後から損したような気分になり，旅が不愉快になったりする。

ノルウェーの各都市のホテル宿泊費は高い。特にスピッツベルゲン島は2つのホテル（SAS Hotel と Spitsbergen Hotel）がいずれも2万円から4万円ほどでユースホステルは個室が9000円程度である。

トロムソから1000 km 北のロングイヤービーンまでは1日1本の空の便があり，正規料金は往復6.6万円ほどするが，エイジェントなどで購入すれば半額程度でチケットが手に入る場合もあるとトロムソのユースホステル「ヴァンドレヒエム」のフロントがいう。半額料金は滅多に出ないが，20～30％引きならあるのではないか，と。

しかし，午前中の便に乗る都合からして空港に直行せざるを得ず，結局正規料金のチケットを買う羽目になったが，これが満席，乗れただけでもラッキーの状態であった。

距離は 1000 km，所要時間は 1 時間 40 分だ。

20 年前，オスロからトロムソ，そしてハンメルフェストへと飛行機を乗り継いだことがあった。荷物検査など何処もなく操縦室と客室の間のドアも開いたまま運航していた。

北欧はハイジャック事故などない安全な地域である印象を強めたのだった。しかし，9.11 以後，ノルゲもチェックは厳しくなり世界の空港の検査基準が導入されていた。

バレンツ海上空は厚い雲が覆っており視界はまったくきかない。

飯塚浩二東大教授が 70 年前，アイスランドから船でスヴァールバル諸島に向かったとき，毎日がガスで視界がきかなかったと書いているが，そんな状況を想起させた。

観光客が多いせいか，皆ビデオカメラや，なかには放送用カメラを準備して島の近づくのを待っているが，結局滑走路に入るまで島影は見えなかった。

空港はかなり強い雨が降っている。北大低温科学研究所小林教授が「空港から街まで 4 km ほどあるが，歩くのであれば銃を持った案内者をつけたほうがいい」といったが，タクシーもあり，宿を回るバスもあることがわかった。多分 20 年以前の状況だったのであろう。

バスの窓から眺める空港とロングイヤービーンの街までの連絡路は，今日では北極熊が出没するような状況にない。車が頻繁に行き交い，道路も簡易舗装されている。

「ゲストハウス」と名のついた宿は，街外れの空港からもっとも遠い場所にあった。センターハウスでチェックインを済ませたが，宿泊施設はそのほか 5 棟ある。うち 3 棟が利用されているようで，あとは空室のように見えた。

ユースホステルのフロントからプレゼントカードを渡された。私の 69 歳の誕生日を祝う娘からの贈り物で，商品券であった。こんな地球の外れに東京から商品券を即座に届ける方法があるとは知らなかった。

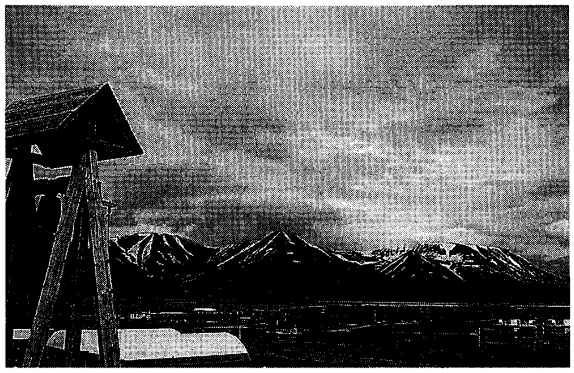
別棟に歩く途中，壁の一部が剥がれた場所からセンターハウスの土台が見えていた。永久凍土層の上に丸太が打ち込まれ，その上に建物があった。これはアラスカのフェアバンクスでも見た構造であり，ロングイヤービーンの街中でいたるところで見る光景になったのである。

ユースの部屋の鍵を開け，ドアを開こうとすると途中で動かない。よく見ると廊下が波打っていてドアがスムーズに動かないことがわかった。炊事場やサロンも同様だった。

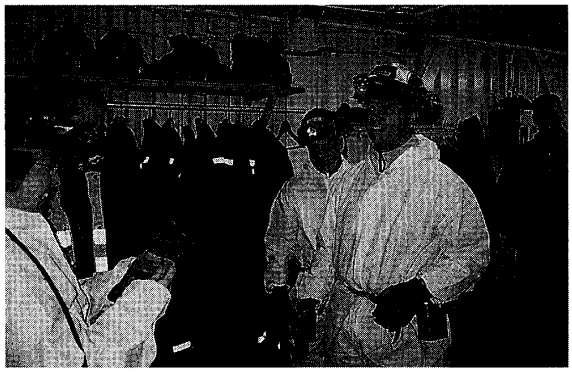
舗装道路も冬夏の凍結と氷解で補修工事が引きも切らない。永久凍土層に建つ建物や道路の宿命なのかもしれない。

夕方，5時半，雨も上がったので3km離れたダウンタウンのスーパーマーケットに食材やアルコール類を買いに出かけた。店は7時までであるから急いで歩け，といわれる。

日曜日は閉店だから今日，買う以外ない。人口わずか1700人の街である。食品を売る店は1軒だけである。



Svalbard Univ（中央）
アドベント・フィヨルドに近いスヴァルバル大学。オスロ大，ベルゲン大，トロンヘイム大，トロムソ大の4大学による設立。極地研究の拠点。外国からの研究者，学生が多い。（中央正面）



ロングイヤービーン Grave 7　繰込み口
標高約400 m地点からほぼ水平に坑道に入り切羽まで約2km坑内に入ることは可能であるが，坑内は凍結しているから凍結防止衣服を着用しなければならない。（稼動中）

10，スヴァールバル条約と石炭産業

1920年，パリで条約が締結されてスヴァールバルは正式にノルゲの領土になったが，条件がついた。条約国はこの島に自由に住み，経済活動ができるというものである。早くから石炭の埋蔵が確認されていたし，狩猟や漁労，北極探検の基地などの利用方法があったから，ノルゲ人のほか，イギリス人，オランダ人，アメリカ人，ロシア人，ドイツ人などが居住や利用で手を挙げた。

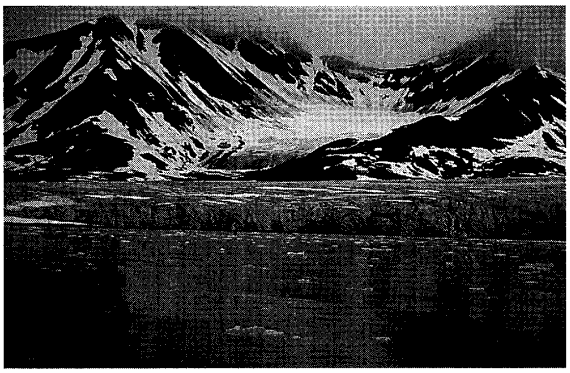
集落として定着したのは石炭採掘地である。最も早かったのは1906年，アメリカ人のロングイヤービーンが石炭採掘を始めた。条約締結以前に，同名の街で炭鉱経営に乗り出したから，この島の石炭の歴史は2006年でまる100年になる。

良質の石炭が採掘できるが，露天掘りではない。石炭の埋蔵地域は海底ではなくプラス標高の地上を横穴で掘り進む場所が多い。永久凍土層に眠る石炭資源は，一見氷塊が層状になっているように見える。比較的港に近いフィヨルド湾岸の炭田が掘られてきたが，マーケットが遠い。ロシアは北極海沿岸のムルマンスクに運んでいた。ノルゲは本土の北極海域の街に運んでも，ムルマンスク同様1000kmはある。ドイツやイギリス市場には2000km以上ある。困ったことに，フィヨルド（峡湾）やブクタ（湾）には，夏でも流氷が流れつき，あるいは氷河が流れ落ち航行を不能にするのである。

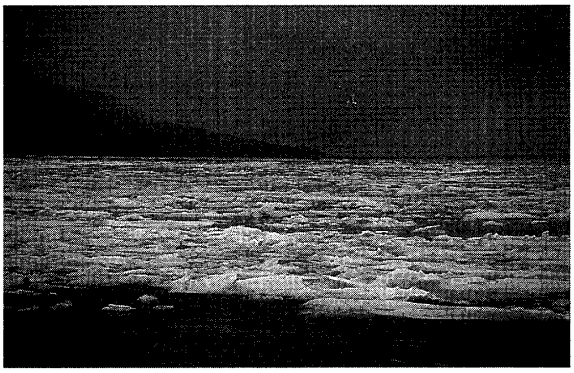
だから，マーケットに石炭の安定的供給を行うことが難しい。1970 年代にはエネルギー革命が起こり，石油への転換が石炭需要を激減させた。不利な条件が重なるなか，炭鉱は所有者や採掘会社が次々変わった。

今日では，放棄された炭鉱の坑口や索道の木製支柱，往時の運搬機械が，無残に捨てられた状態になっているが，細々と掘削している会社もある。石炭の輸出は途絶え，島内の火力発電所や暖房用に使われている程度の生産に留まっている。

スヴァールバル条約を最も有効活用したのはロシアだといわれる。ロシアは極東地域と北極海を除けば直接，海洋に出ることが難しい。バレンツ海に浮かぶスヴァールバル諸島は地政学的，軍事的価値があるからスピッツベルゲン島に 2 つの石炭集落をつくった。バレンツバーグ（人口 900 人＝ 2004 年）とピラミデン（人口 2000 人＝同）に国策石炭会社を創設し，石炭掘削以外にも気象観測所，レーダー基地を設置し，ロシア時間を採用し，ロシア通貨を使い，いまでもレーニン像が建てられているし，石炭の採掘量などもはっきりさせない，いわば治外法権的性格が色濃く出ている。



イスフィヨルド北西のボア氷河，標高 880 m のトロールハイム山から流れ出し，イスフィヨルドを埋める。崩壊氷が海に漂う。



7 月上旬，南からの流氷によってグロンフィヨルド（イスフィヨルドの一部）が埋め尽され，ロシアの石炭街バレンツバーグに船が近寄れない。(Spitsbergen ＝ Norge)

冷戦時代，潜在敵国であったノルウェーとソ連は不信感を抱きながら共存していたが，現在でも住民の間にはお互いに信頼のおけない島民意識があると聞いた。

第二次大戦中はドイツのヒットラー軍に踏み込まれたスヴァールバルでノルゲはソ連と協力して対応せざるを得なかったが，戦争が終わるとソ連は諸島 9 島の一部を割譲するようノルゲに迫る場面があった。ノルゲは NATO に加盟し，アメリカをはじめ，西側の力を借りて難局を乗り切っている。

スヴァールバル諸島には 9 つの島がある。集落があるのはスピッツベルゲン島だけだ。

最大の街は，ロングイヤービーン（人口 1700 人＝同）で炭鉱に従事する人々は少ない。観光業や研究施設，商業活動や運輸，サービス業にあたる人々で構成されている。空港，

小中高校，大学，スーパーマーケット，レストラン，教会など生活に必要な機能は一通り揃っている。他には北緯79度のニ・オルスン，この街は炭鉱でスタートを切ったが今は国際的研究集落で常住人口は40人＝同，臨時の研究者も含めて100人が住む。

ロングイヤービーンからやや南，ミーエンフィヨルドにスヴェアグルーヴァがあり210人ほど常住しているが，これはもともとスヴェルゲ（スウェーデン）人の炭鉱だったが，今はノルゲ炭鉱になっている。

他の炭鉱集落は，ほとんど閉山しているが，ロングイヤービーンに近い場所は，ほんの数軒の別荘地になっていた。

11，ヒュッティルッテン（沿岸急行船）とロフォーテン諸島

北欧やアラスカを取り上げるとき，私はいつも緯度や経度でその位置を確かめる習慣ができてしまった。同緯度でも不凍港もあれば凍りつく港もある。緯度が10度違えば，距離は1100km異なる。南半球でないのに同じ経度線上で1100kmの北が不凍港で南が凍港など信じられない現象が起こる。最暖月8月の気温は網走と釧路を比べると，北の網走が1.3度C高い。しかし緯度差たった1度であるから理由ははっきりしているにせよ違和感はあまりない。

だが，ロシアのムルマンスクに近い北緯70度の街キルケネスが年間凍結しない港を有しているのに同経線上で南北1100kmの緯度差がある北緯60度のサンクトペテルブルグやそれに近いヘルシンキの冬は海が凍結し，砕氷船が動かない限り船舶の航行はできない。フィンランド湾は勿論，ボスニア湾を含むバルト海が凍結に見舞われるのである。

キルケネスがスオミとロシアの国境を越えて東にあることもなかなか気づきにくい。

バレンツ海にガルフストリームが流れ込んでいるから冬の3ヶ月間の気温は零下10度C前後まで下がるが，コラ半島の北部あたりまで凍らないのだ。

キルケネスを出発点とし，ノールカップ（北緯71度12分22秒）に近いホニングスヴォーグやトロムソ，トロンヘイムを経由し東経5度，ノルゲ西部のベルゲンに到着する。往復13日間でスカンディナヴィア半島を巡航する豪華客船がある。ヒュッティルッテン（沿岸急行船）である。

この船，北上するときは6日間，南下するときは7日間を要する。これも北上するガルフストリームに影響されているのか，寄港する場所も若干異る。

運賃は夏，片道で22万円。これにはキャビンの値段はない。キャビンは一日4000円からで別料金である。スウィートだと2.7万円から13万円で船室の広さや設備の状況によ

って異なる。65 歳以上のシニア世代は，身分証明書を出せば 2 割引きである。

キャビンを予約しない場合，夜はソファなど，どこでも休むことが可能だ。

この船はフィヨルドなどの入り江を通る時間帯が多いから，波は比較的静かで，氷河谷やカールなど景色のいいところに人気がある。

船が停泊する港に事務所や発券機などなく，真夜中の出帆の場合，待合室がない。すべて船の中で業務を行うから港近くのパブで酒を飲みながら船を待つ以外ない。他の店は午後 7 時ごろからすべて閉鎖される。

私は，トロムソからロフォーテン諸島のスヴォールヴォーまで一昼夜半この船を利用した。

この沿岸急行線から眺めるフィヨルドなどが最も美しいとされているからである。距離にすれば 100 km はないのではないか。船はブクタ（湾）内やフィヨルド（峡湾）を航行するから，防波堤はなく，波も静かである。船は多くの港に停泊する。

北緯 70 度に近い北極圏内最大の都市（人口 6 万人）のトロムソを真夜中に出発した沿岸急行線は，白夜の入り江を滑るように進み，ジボスタッド，フィンスネスを経由してロフォーテン諸島の玄関都市ハーシュタッドに停泊。そこから船は大きく西に舵を切り，リソイハムンからソートランドに向かう。その先ストックマークネスからスヴォールヴォーまでのアウストネスフィヨルドに向かい，この航海で最も美しいといわれる狭くて急崖が迫るトロールフィヨルドに立ち寄って船を回し，ぎりぎりの幅の入り江を戻り外洋に出る。間もなくロフォーテン諸島南の中心都市，スヴォールヴォーに着くのである。

いくつもの港に停泊するのは，島の人々に生活物資を運ぶと同時に，島民の足の役割も果たしているからである。

それにしても巨大客船だから，見た目島民の足の感じはせず，ゆったりフィヨルドの旅を楽しむ観光客の姿で夏の白夜にひとのゆったりした動きが，スローフィルムを回しているような感じに映った。

北海道と本州各都市を結ぶフェリーとの違いは，船の前面，最も視界のきく部分が客席になっていることだ。日本の場合，この部分は立ち入り禁止の機関庫になっている場合が多い。沿岸急行線は値段も高いだけあって船の装飾も豪華であり，食事なども種類が多くやはりフェリーとは異なる。

ロフォーテン諸島は「世界で最も美しい島」といわれる風光明媚，夏は涼しく冬もそう寒くない。ヴォーゲン島，ヴェストヴォーゴイ島，フラックスタッド島，モスケネス島によって構成されるが近年はノルウェー本島とこの 4 つの島も橋梁やトンネルで繋がっているからレンタカーなどで容易に本島からの乗り入れが可能である。

12，タラ漁と観光のロフォーテン諸島

「アルプスの頂を海に浮かべた」と形容されるロフォーテン諸島，古くはハンザ同盟都市ベルゲンの貿易を支えたとも言われたタラが今日までの島々の豊かさを反映している。

夏の夕方，沿岸急行船がスヴォールヴォーに着くころ，外洋を吹く強い西風で船はかなり揺れ，多少船酔い気分で船を降りて宿探しに観光案内所に向かった。強い風と雨で雨具を着用したが，やはり寒い。

ユースホステルかロルブーを探すが空き室がなかった。ノルウェーは物価が高いから最初からホテルは考えていない。ロルブーは猟師小屋のことでロフォーテン諸島全域に見られる。赤い壁，白い窓枠，濃い青屋根のタラ漁に使われてきた小さな小屋で，主に漁港に近い海岸べりにある。

これらが改良され，内部には厨房，風呂，トイレ，ベッドが用意され簡易宿泊所として使われているから料金も安い。なかには魚を貯蔵する倉庫を改良してベッド類を持ち込み「ロルブー」と名打って提供している宿舎もあった。もちろん海辺である。

ロフォーテン諸島は潮位が差が大きく，干潮と満潮の差は4～5mに達する。

スヴォールヴォーに泊まれず4km西のカベルスヴァーグのユースホステルに5泊することにした。資料探しや切符手配，美術館や博物館見学，そして猟師町ヘニングスヴァーや諸島の南行き止まりのオーなどへの便は必ずしもいいとはいえない。4kmの道のりを何回も歩くことになった。バスもあるが1日ほんの数本，待つ間に徒歩1時間で到着する距離だ。

歩くたびに美しい海，係留されている数々のヨットやモーターボートと中規模漁船，切り立った岩場，小奇麗な家々，平地に咲き乱れる高山植物や僅かな家庭菜園（主に芋と葉もの野菜），小さな小川の流れ，漁獲したタラの干し場などに感動する。

カベルスヴァーグも漁村で，この諸島で最も古いといわれている。ロルブーもあり，レストランや酒販売店もある。

ノルウェーでは酒を買うのが大変である。酒店は滅多にないし（1つの町に1つ程度），午前10時ごろから午後4時ごろで閉店，週末は休みである。船の中でウイスキーのビンを立てて飲んでいると下船時まであずかるといって取り上げられてしまった。隣のひとが「気の毒に」といって自身のお酒を分けてくれる。

そして，「ノルウェーでは決してボトルをテーブル上に置いてはいけません。テーブルの下においてください」といわれる。「郷に入れば郷に従え」でいわれるままである。

カベルスヴァーグでもスヴォールヴォーでも週末は買い物ができない。一部レストランやパブを除いて，店は概ね閉店だ。忘れ物が届いているか，警察署に赴いた。週末はドアが開かない。張り紙があって急用があれば連絡せよ，と電話番号が書いてある。

あきれるというよりもよく考えている，と思った。この国の人々は夏休みは１ヶ月半程度保障されている。７月はじめから９月終わりごろまで自由に取れる。

働き盛りに人間は，生産者の側面と消費者の側面を持ち合わせている。生産者の側面は働き給与を得る部分で，遊んだり休養する時間は消費者の側面だ。働く時間が増えれば遊ぶ時間は減る。働く時間が少なくなれば遊ぶ時間は増加するのである。

商店や官庁が夜中まで住民サービスをすれば，そこに働く人々の自由な時間は取れない。スーパーマーケットや専門店，百貨店が週末休みになるならウイークデイに買い物すればいい。週末でもサービスして欲しいのであれば自分の休日は返上しなさい，という話になるのではないか。

交通機関だって乗車人数が少なければ便数を減らせばいい。そこに余裕が生まれる。これが余暇時間になるのだ。

めっぽう忙しい日本のサラリーマンの働きすぎは，自身だけでなく人の余暇時間も奪っているのだ。

外国と違って日本は「狭い国土に溢れる人口」が元凶だなどと宿命論が出てくると，豊かな日本づくり，美しい日本づくりはいっそう困難になるようにも思った。

13，ヘニングスヴォー

カベルスヴァーグから25㎞西にロフォーテン諸島でも最も古く，タラ漁生産量の多いヘニングスヴォーの街がある。バスはスヴォールヴォーからカベルスヴァーグ経由で２時間に一本だ。半島に突き出した漁業集落は船入間とロルブー，水産加工場と倉庫，それに漁家を改装したような小さなホテルやみやげ物店，タラ干し棚などが犇めいている。

岩盤が羊の背に似て緩やかなカーブを描く花崗岩で，それらの上には角材を組み合わせた高さ３ｍくらいのタラ干し棚が独特の雰囲気を保ちながらいかにもタラ漁の街を象徴しているように分布している。

船入間には漁船だけでなく，ほとんど漁船と同数のレジャー用ボートも係留されている。ボートが島の人々の足になっているからバスの便がよくないのかもしれないと思った。

ロルブーは海にせりだすような丸太の骨組みの上にある場合が多い。潮の満ち干が大きいので干潮時間帯は，この骨組みが高く映ずる。

ロルブーのなかは比較的広く数人分のベッド，トイレ，台所，テーブルがあって簡易宿泊所だ。かつては漁師宿として使われていたが，いまは観光用に改造されたり，新築されたりしている。

宿泊客が出払った後，若い女性が室内を掃除している。自由に見てくださいという。

宿泊費は3～4人用で70～80クローネ（1.4～1.6万円）だから一人あたりでは4000円程度か。

清潔で楽しい宿である。壁は赤，窓枠などアクセントの白い線が使われていてロルブー共通の特徴が見られた。

スヴォールヴォーを発つ最後の夜，「スヴィノーヤ・ロルブー」に一泊することにした。

これは外からみれば2階建て倉庫の改良したもの。建物の中は改築したホテルと同じ，天井が白色，壁は薄い黄色，ロッカーは緑色，むき出しの蛍光灯が3本あるだけのシンプルなものである。外も中も含めてロルブー特有の赤と白のコントラスト模様はない。

共用はトイレと炊事施設，冷蔵庫が置かれているからユースホステルと同格の感じだが間取りはやや広い。シーツ類は別料金で1泊8000円程度であった。

外気温は9～10度C，室温は18度C。寒いから室内でフリースなど羽織り，外出時はダウンとゴアテックスの雨具が必要だ。7月中旬のロフォーテンは肌寒いし，雨と濃霧の日が多く，真夜中の太陽は5日間の滞在で，一回も見ることがなかった。

水産加工場とホテル，レストランを経営する「フィンホルメン・ブリッゲ」のパブで昼前からビールを飲みながらタラ漁の話を伺う。

「島でのタラ漁獲高は年間3.5万トン程度，これはコンスタントな漁獲量で増えたり減ったりすることはない。漁期が2月から4月。漁師は3ヶ月働いて1年分の生活費を稼ぎ出す。乱獲をしないから資源は護られている。

タラの漁期以外は雑魚をとって収入を得ているひともいる。鮭やコールフィッシュなど

ロフォーテン諸島の中央，タラ漁の街として知られるヘニングスヴァーのタラ干し棚。タラ漁は冬から春にかけて4ヶ月間だから，その間利用される。

ホテル兼レストランで働くスヴェルゲのアルバイト学生。ノルゲの時給はスヴェルゲの2倍以上だという。中央の柱に吊るされているのは干ダラ。

捕獲する漁師もいるがメインはタラ漁だ。漁獲したタラは棚干しする。干せば目方は22%まで減少する。

乾燥させたタラのほか，塩漬け，瓶詰めなどに加工し，イタリアなどに輸出する。イタリアではクリスマス料理にロフォーテンのタラを使う習慣が古くからあった。

船は漁師が個人的に所有しており，大きさは10トンから100トンの中型船が多い。」

複雑な花崗岩の入り江がタラ漁の漁港としてうまく利用されている。ここでは防波堤はいらない。天然の漁港が所狭しと存在する。

パブで朝から掃除などアルバイトをしていた学生は，夏の休暇を利用してスヴェルゲからやってきていた。

「ノルゲは物価も高いがアルバイト料も高い。1日働けば800クローネ（1.6万円）にはなる。これはスヴェルゲの2倍にあたる」という。

観光客には悲鳴をあげるノルゲの物価高も，アルバイトで稼ぐ身になれば逆に有利に作用する。

パブ・レストランのドアを開けて広いウッドデッキに出ると，そこではバーベキュー装置があり，丸い大きな桶をおいて露天風呂にしている。デッキの上の風呂から海やタラ漁船，そして小さな猟師町を眺めるのもまた，風情あるべしといっていいだろう。

このパブの営業時間は午後4時まで。誰もが早く店を閉めて，白夜の海や島の大自然を楽しむのだ。

前の桟橋に1人の男がボートの出帆の準備をしていた。船は長さ15mで17トン，20人乗りだという。

トロンヘイムで鉄道員をしていた男は定年退職し，ロフォーテン諸島のヘニングスヴァーに移り住んでいる。医者や看護師を乗せて島を回るパトロール，医療用の中古船を購入したが，新品で買えば2000万円以上だ，と自慢げだ。今は妻と2人で海を楽しんでいる。

ノルウェー人の豊かさは，北海油田の石油採掘にもあるが，ここでも，労働時間を減らしてレジャーに向ける時間を増やすことによくあらわれている。

14，圧巻の自然景観（カベルスヴァーグからオー）

スヴォールヴォーに近いカベルスヴァーグからオーまでは直線にすれば短いが，島の低いところを繋ぎ，トンネルや橋梁で結ぶくねくねした道のりだから100km以上はあるし，車も時速制限90km以上のスピードなど出せない。それに，スヴォールヴォーからオーまでの直行便は土曜日，日曜日はお休みである。やむを得ずレクネスまで行って2時間ばか

り待つ便に乗り換えることにした。最も重要な観光ルートでも週末休む感覚はスーパーマーケットや警察署が週末休む感覚と同じで日本人には理解できない。

カベルスヴァーグから途中のレクネスまでの間には平地に限って牧場があり半乾燥の牧草をロールにしたサイレージの白いビニールに包まれて農地に放置され，乳牛（主にネローレ種）が放牧されている景観に出会う。野菜は栽培されているが麦類など結実する穀物にはお目にかかれない。

レクネスの町は南ロフォーテンの中核都市である。山からの斜面に広くジャガイモ畑があり牧場には羊や牛が飼育され牧歌的だ。街の中心にはCOOPを真ん中に3軒のスーパーマーケットが軒を連ねているが，COOPの入りこみ客数が最も多い。極端に多いといったほうがいいかもしれない。イギリスのロッヂデールに始まった生活協同組合運動はノルゲでも確実に根を下ろしている感じが強い。

山には白樺など広葉樹が見られるが針葉樹は滅多にない。海辺には漁家がまばらに散村を形成し，波静かな海辺に旧式の漁船が繋がれている。

海の中に円形の金属製の枠に魚網が仕掛けられている。定置網だが日本の様式とは違う。

5時間経過してオーについた。バス乗客はほとんどいない。

オー到着は，午後5時。折り返し6時40分で帰らないともうバスはない。

オーはAにウムライトをつけて発音させている街の名前（Å）だが，陸上交通機関が通行している最南端の街。ほんの数10軒の漁家と水産加工施設，公民館や資料館があるだけの漁業集落だが，雄大な氷河による浸食地形や湾入部，滝や湖があって美しいため観光客がやってきてトレッキングを楽しんだり，テント生活をしている。海に近いとはいえ植生や氷河の状況は高い山岳地帯を思わせる景観であるが，時には石灰岩地形で名高い中国のチャン族自治区にある桂林に似た景色のようでもある。

ロフォーテン諸島南端のオーの街のロルブー（猟師小屋を簡易宿泊施設として利用）。壁は赤，窓枠白，屋根，濃い青色が特徴。自ら釣りあげた魚をさばく釣り仲間。遠方の船は遊漁船。

オーの街角で釣り上げたばかりの魚の内臓を包丁で切り開いている光景に出会った。釣り人が5人ほど，釣り上げたばかりの魚だが魚体が1m以上ある大きなものばかりだ。

日本の海岸で見るものとはスケールが違う。小さな釣りボートにライフジャケットをつけたまま乗り込んだレジャー客が釣り上げ，漁師のまな板を借りてさばいているのだった。

残雪と飛沫をあげて長い距離を滑り落ちる数々の滝の白，濃い灰色の氷河による削剥壁，湖のブルー，こうした色彩の対照が南ロフォーテンのコントラストを異様に輝かせていた。

夕刻18時40分のバスに乗り込む。帰りはバスの運転手が私の年齢を聞いて，運賃を半額にしてくれた。シニア料金が適用されているとは知らなかった。

この車が午後11時にカベルスヴァーグに着いたとしても空が暗くなることはない。

道路わきは40〜50cmに伸びたミヤマキンポーゲやシラネニンジンが咲いていた。エゾニューに似たセリ科の植物や樅の木も立派に育っている。この種はスピッツベルゲン島で見ても，大雪山系や日本アルプスで出会っても，こんなには大きくならない。ロフォーテンはそれだけ年間の気温が高いのかもしれないと思った。白夜の7月中旬，北緯70度近い北の島々である。

おわりに

1ヶ月近い海外旅行には携帯荷物も15kg以上になる。荷物の積み降ろしも腰と肩に重圧を加える。いい写真を撮ろうとすればコンパクトカメラというわけにいかない。交換レンズなど用意すれば撮影機材はさらに重さを増す。だからといって団体の旅に踏み出す気持ちにはなれない。自由な時間は少ないし，支出する旅行値段が高い。

北極海に浮かぶスヴァールバル諸島の1つ，スピッツベルゲン島のロングイヤービーン空港で12人ほどの日本人団体客に出会った時，エージェントに支払った旅費を聞いてみた。旅行場所は，スピッツベルゲンとロフォーテン諸島で12日間，費用は1人72万円だ。諸経費を入れれば90万円から100万円くらいかな，という。多くは定年退職後の夫婦で，「冥土にお金を持参できないからね，今のうちに旅でも」と。

私など，この2倍以上の日数（25日間）で，すべて含めて彼らの3分の2程度であるからかなりケチケチ旅行をしていることになる。

特にノルゲは物価が高い。北海油田の石油採掘で国民が潤っているし，石油製品が高騰している折りだったかもしれない。

ロヴァニエミに居住するティモ・パッソーヤにノルゲの街の安宿を予約するようメールで依頼したが，「あの国は，物価が高く，安宿など探せません」と断られた。

ビールが一杯1000円とか，一般的宿代が2～4万円が尺度になる。スヴェルゲの学生が夏休み中アルバイトはノルゲで行うと2倍以上の収入が得られる，と言っていたのは決してオーヴァーな話ではない。

物価が高いといっても，夏の峡湾（フィヨルド）や冬のオーロラ観光に訪れる外国客は決して少なくない。ロフォーテンのヴィジターセンターや宿のフロントに，日本人観光客の動向を尋ねてみると，「冬の入り込み客が多い」という。オーロラと極夜（白夜とは逆の太陽が顔を出さない日々）に人気があるのかもしれない。

夏の人気はロフォーテン諸島を「海に浮かぶスイスアルプス」としてトレッキング，ロッククライミングする若者達や海から峡湾を眺める旅に人気が集中している。

スオミの女性，ミーナ・ヨキビルタの夏の楽しみは，スヴォールヴォー近くのロッククライミング名所「山羊の角」の岩登りだという。魅力一杯の氷河削剥岩場が所狭しと林立しているロフォーテン諸島はロッククライマーの憧れになっている。

北欧は安全神話がまかり通っていた。ハイジャックの経験がないし，物が盗まれる話も聞いていない。国民全体が豊かで貧乏人がいない社会は犯罪が起きにくい，と思われていた。新聞・雑誌の無人販売スタンドがあり，お金がよけい入っていることがあっても，不足したり，盗られたりすることがないと信じられていた時代もあった。

しかし，今日では多くの外国人が出入りする観光地に変わりつつある。また，外国人労働者の働く舞台も格段に広がった。レストランで働くひと，タクシー運転手，ホテルの掃除夫など南欧，アフリカ，アジアからの労働者が多い。以前の安全神話はもろくも崩れ去った感じすらする。

ロフォーテン諸島のカベルスヴァーグから南端に近いオーに向かうバスの中にカメラスタンド（一脚）を置き忘れた。値段にして高い物ではないが，必ず警察署かバスターミナルに届いている筈と思い，3日間警察署やバス会社に通ったが出てこなかった。タクシー代などはスタンドを購入する数倍もかけたが徒労に終わった。

オスロ中央駅からタクシーを拾い，ムンクホテルに向かった。タクシーは中央駅を一回りして元の場所に戻った。道が一方通行だというのだ。ドライヴァーに地図を示し，行き先を指示する。しかし，方向が違う。文句を言うと仲間を呼んだ。仲間の車に乗り換えろ，という。メーターは既に135クローネに達している。私は乗り換えを拒否し，ホテルの方向を指示し，メーターは止めさせた。オスロは何度も来ているからおおよその方向感覚はあった。ホテル前で値段を交渉するが埒があかないから運転手をホテルのフロントまで同行させた。フロントは中央駅からムンクホテルまでのタクシー代は100クローネくらいだという。運転手は100クローネを受け取って帰っていった。仲間の運転手を含めアフリカ

からの労働者であること，日本人をカモにしていることは容易に理解できた。

移民や移住労働者を責める気は毛頭ないが，EC から EU に統合が進むヨーロッパ国際社会はこうした労働者の受け入れに比較的寛容である。

タラ漁のロフォーテン諸島は古くからの地場産業として発展してきた。漁船の大きさも漁獲量，漁獲時期も規制されてきたから，今日でも漁業資源が減少したり，枯渇したりすることはない。北海道のニシン漁のような極端な資源枯渇はないのである。

タラの品質が優れていること，漁獲されたタラはほとんど棚で干し，乾物として輸出する。輸出国の中心はイタリアだが多くはヨーロッパの国々であり，自国消費に回される部分もある。値段も高価で，わずかの期間のタラ漁収入で年間の家計費を補う漁家が多い。

もっと収入を増やそうとすれば，冬のタラ漁期間以外に鮭，鱒やニシンなどを捕獲すればいい。

タラの干し棚に，鮭の頭が大量に干されている光景も決して珍しくない。これはフィッシュミールや肥料にするのだ。

水産資源を護ることが漁獲量の安定をもたらす。そして地域漁民の収入を安定させるのだ。

ノルゲ，スヴェルゲ，スオミの国々は国土面積こそ日本よりやや大きいか，小さいか程度であるが，人口は 500 万人から 800 万人と日本から見れば羨ましい限りのこぢんまりした国々である。人口密度が小さいのが国民を豊かにしているとの宿命論が聞かれる。

第二次世界大戦以前，日本人の貧しさは「狭い国土に溢れる人口」「狭い国土に乏しい資源」に原因があり，海外侵略必然の標語のように使われてきた。

戦後日本の人口は，この時期の 1.5 倍に増え，資源は遙かに枯渇したにもかかわらず経済は急成長したことを考えると，この言葉は戦争遂行に都合のいい為政者や「死の商人」たちの本質を隠蔽するための，一時しのぎの戯言だったように思われる。

深刻だったのは，この言葉が学校教育のなかで徹底され，多くの若者達を戦場に追いやったことだ。軍国化した教育体制のもとでは，この一言の批判も責任ある回答を求めること能わず，ひたすら頭に記憶させられるだけの状況だったのである。

今日の日本の状況を考えると，日本の国土の 4 分の 1 の太平洋ベルト地帯に 4 分の 3 の人口が住み，過密化している一方，国土の 3 分の 2 の自治体が過疎地帯の指定を受けている現実だ。国土の有効利用の視点からいっても，また地域施策を考える視点からいっても簡単に人口が少ない国が豊かになれるなどという論理は通じない。

北欧の国々に共通している 1 つの現象は，日本より遙かに過疎地帯であっても鉄道やバスなどの公共交通機関が通じていることである。60 人乗りの大型バスに 1 人だけの乗客

であっても国の責任で走らせる，ということだ。私は何回もたった１人の乗客として山間部のバスに乗車して考えた。

税金が高いから何でもできる，と説明する人がいる。

平均でいうと，日本の国民１人が支払う税金は所得の 26%，北欧は 43% の数値が出されている。これはべらぼうな差である。

しかし，北欧の国民が享受する恩恵は公共交通機関だけではない。高校・大学の授業料は無料であるし，病院等医療機関に罹ったときの費用も無料，これは外国人にも適用されている。

年金支払額も，定年後海外旅行を楽しむ程度の部分は織り込まれている。

大切なことは政策立案上の考え方である。ペイしない，利益に結びつかないからやめる日本，個人として自由に生きていく世界を尊重し，それをサポートする北欧。

利益が生まれない，損失が重なる鉄道やバス路線は廃線とする。いくら環境の整った，住みたいと心に思う地域であっても街との交通連絡が途絶えると老人や子供のように車を運転できない人は住み着けない。医療機関が消えた地域に住む老人の不安は限りなくおおきい。ペイしないから切り捨てられる問題ではないように思う。

過密地帯がさらに過密になり，ひとの居住条件を悪化させ，美しい自然環境を擁する広大な過疎地帯は，さらに過疎化が進む。

北欧の記憶は，まさに日本の進路に対する警鐘であると思われた。

参考文献

飯塚浩二著「北緯 79 度」三省堂　1938 年 6 月

K・ハストロプ著　菅原邦城・新谷俊祐訳「北欧の世界観―北欧社会の基盤と構造―」東海大学出版会　1996 年 5 月

百瀬宏・村井誠人監修「北欧」（読んで旅する世界の歴史と文化）新潮社　1996 年 5 月

高島昌二著「スウェーデンの社会福祉」ミネルヴァ書房　2001 年 7 月

佐々木博著「EU の地理学」二宮書店　1996 年 4 月

武田龍夫著「北欧を知るための 43 章」明石書店　2001 年 3 月